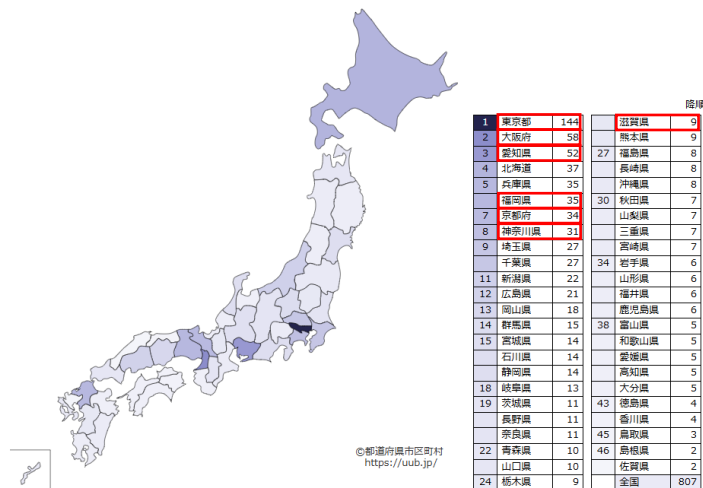


高大連携事業による地方高校生流出の防止

～大学生へのイメージをよりクリアにする～

日本の大学は「都市圏集中・地方流出」の構造が形成されている。

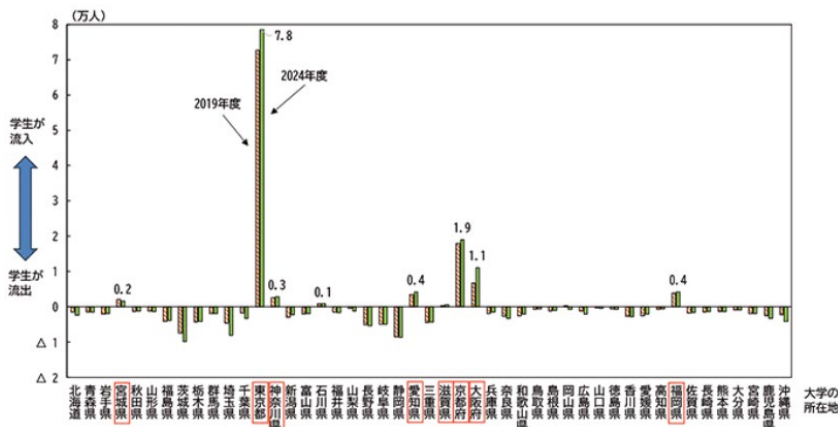
大学数合計 / 2022年（令和4年）



図① 大学数合計/2022年（令和4年）（参照：都道府県市区町村HPより）

図①からわかること

- ・日本三大都市（東京・大阪・名古屋）の大学数は、全国合計の30%を占めている。
- ・下図の流入数の多い地域は、大学数も上位に位置している。（赤枠線地域）
- ・地方の都道府県の大学数は、横ばい状態にある。



(備考) 1. 文部科学省「学校基本調査」により作成。
2. 流出入者数は、「都道府県別の大学入学者数—当該都道府県内の高校生の大学進学人数—」で定義。
3. 赤枠は、流出入者数がプラスの都道府県。

図② 大学進学時の都道府県別流入・流出者数（参照：文部科学省2024年）

図②からわかること

- ・都市圏と近い都道府県の高校生が、都市圏に流出している。（茨城県、埼玉県、静岡県など）
- ・5年間で日本三大都市（東京・大阪・名古屋）や、その他都市圏の流入数が増加傾向にある。
- ・コロナ化を挟んでも、「都市圏中心・地方流出」という構造が形成されている。

日本の大学は「都市圏集中・地方流出」の構造が形成されている。

	転出理由	当該理由を選択した回答割合 (%)	調査地域 (調査主体)	サンプル サイズ
進学 環境	・希望の進学先がある	(希望の進学先の所在地が) 札幌市にある：89 東京圏にある：27	北海道 (北海道)	高校128校 大学15校
	・学びたい分野を学べる先が地元でない	21.5	全国 (内閣府)	5,443名
		約15	全国 (国土交通省)	4,376名
	学力に見合った学校が地元でない	19.0	全国 (内閣府)	5,443名
生活 環境	進学先地域に憧れがあった	13.8	全国 (内閣府)	5,443名
	親元を離れたかった	21.5	全国 (内閣府)	5,443名

図③ 各種の意識調査による、進学・就職時の移動理由（参照：内閣府 2024年）

図③からわかること

- ・ 学びたい分野が地方にないため、都市圏の大学に進学するという理由が比較的多い。
- ・ 必ずしも都市圏の大学ではないといけないという理由ではない高校生も一定数いる。
- ・ 特に、生活環境を変えるために都市圏の大学進学を希望している高校生が多い。

データのまとめ

- ① 「都市圏集中・地方流出」の構造が一般的になっており、都市圏では、住宅・生活コストの上昇や都市インフラへの負荷など課題が発生する恐れがある。地方では、地方大学の衰退、地域経済の縮小、地域社会の担い手不足など多くの課題が発生する恐れがある。
- ② 地方の高校生が都市圏の大学へ進学する理由は、「学びたい分野が地元にはない」という理由が多い一方で、進学先地域への憧れや地元を離れたかったなど、**学問ではない生活環境の理由**も一定数あるということが分かった。

提案

地方大学の「**高大連携事業**」を一般化し
高校生が大学の学びを知るきっかけを増やす

考察

「**なんとなく都市圏に進学**」を選択して
いる高校生が地方大学へ進学する可能性
が高まるのではないだろうか

高大連携事業の概要

- 高大連携とは、高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携の位置づけ。
- 中高一貫教育や現行学習指導要領の実施等により高等学校の多様化と選択の幅の拡大はさらに進展している。
この結果、特定の分野について高い能力と強い意欲を持ち、大学レベルの教育研究に触れる機会を希望する生徒の増加が予想される。（参照：文部科学省HP）
- 全国の大学の約87%が何らかの形で高校との連携協定を結んでいる。しかし、その中で「定期的に活動している」と回答した大学は、わずか**34%**にとどまる。（参照：文部科学省 2023年高大連携実施状況調査）

図2：共愛学園前橋国際大学の高大連携事業の主な例

連携内容		連携高校
共同授業 (授業を単位化)	高校の授業(課題研究)を高校と大学が共同で実施。受講する生徒は大学の特別科目等履修生となり大学の科目「キャリア演習基礎」の単位が認定される。大学に進学した場合、同学はもちろん大学によっては大学の卒業単位の認定される。	太田市立太田高校
探究支援	高校が設計した探究授業のプログラムの中で、フィールドワークなど外部の手が必要な活動について、教員と学生がサポートに入る。	前橋市立前橋高校
	課題研究のテーマの設定、研究計画の立て方、進め方、発表方法などについて、学生が高校生にアドバイスする。	高崎女子高校(県立)、 高崎北高校(県立)
	探究テーマの設定に役立つ講義、発表会やポスターセッションの講評の講師として教員を派遣。	前橋高校(県立)、 桐生高校(県立)、 中央中等教育学校(県立)、 富岡高校(県立)、 太田女子高校(県立)
デリバリークラス・ 教職員研修	さまざまなテーマについて教員が行う出張講義。探究等に関する教職員研修の講師も派遣。	佐野東高校(栃木・県立)、 伊勢崎清明高校(県立)など 今年度で6校以上予定

市立太田

- ・ 1年を通して行うプログラム。大学の科目「キャリア演習基礎」を単位認定される。
- ・ 前期はGIA（群馬イノベーションアワード）というビジネスプランコンテストへの参加、後期はライフプランについての講義・グループワークを行う。
- ・ 大学生メンター4人が高校生14人のサポートをするため、きめ細やかな指導が可能。

市立前橋

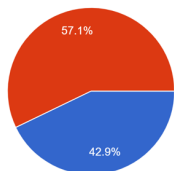
- ・ 1か月集中で行うプログラム。
- ・ 高校2年の課題演習のプログラム。模擬市長選挙という名目で、前橋市をよりよくするためには何が必要かということをマニフェストとして考え、全校の前で選挙演説を行う。
- ・ 大学生メンターが各クラスに1人配置され、最終日に模擬選挙を行い、当選者を決める。

高大連携を履修した高校生に行ったアンケート調査の結果

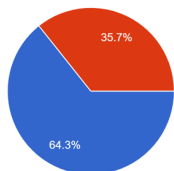
高大連携前の高校生が感じる大学へのイメージ

(対象：市立太田高校の高校3年生、人数：14人)

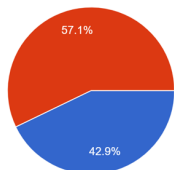
大学生生活全体のイメージ（高大連携前）
14件の回答



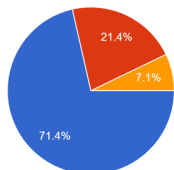
大学卒業後のイメージ（高大連携前）
14件の回答



大学での学び・授業のイメージ（高大連携前）
14件の回答



大学での友だち関係のイメージ（高大連携前）
14件の回答

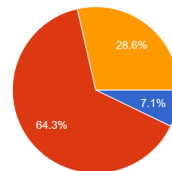


● ほとんどつかめない
● なんとなくつかめる
● はっきりつかめる

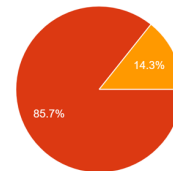
高大連携後の高校生が感じる大学へのイメージ

(対象：市立太田高校の高校3年生、人数：14人)

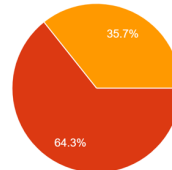
大学生生活全体のイメージ（高大連携後）
14件の回答



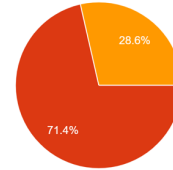
大学卒業後のイメージ（高大連携後）
14件の回答



大学での友人関係のイメージ（高大連携後）
14件の回答



大学での学び・授業のイメージ（高大連携後）
14件の回答



● ほとんどつかめない
● なんとなくつかめる
● はっきりつかめる

高大連携前の調査結果

- ・特に、大学卒業後のイメージがつかめていない。
- ・大学での学び・授業のイメージは他の項目に比べ、イメージがつかめていた。

高大連携後の調査結果

- ・全体的にイメージがつかめるようになっている。
- ・大学での友人関係のイメージがつかめている高校生が増えていることが分かる。

高校生は大学生と関わることで、大学に関するイメージが
形成される可能性が高いことが分かる

高大連携のメリット

- ・ 進路選択の前に、大学生が「何を学ぶのか」を実体験に基づいて知ることができる。
- ・ 単位認定制度があることで、連携した大学進学を選ぶきっかけになる可能性がある。
- ・ 長期的な関わりにおいては、日々のコミュニケーションによって、学びだけではなく、入学後の友人関係や進路へのイメージもつかめるようになる可能性があること。

高大連携の課題

- ・ 大学側・高校側の期待値の不一致によるズレが、長期的な連携にならない可能性がある。
- ・ 高校生の学びに対するモチベーションに依存してしまう部分もあるため、学びの質が担保できない面がある。
- ・ 高大連携で学ぶことができるものだけが、大学全体の学びではないため、高校生の進路選択を逆に狭めてしまう可能性もある。
- ・ 高校教員の負担が増えてしまう可能性がある。

単発ではなく、長期的に高大連携事業を行うこと

地方大学に
求められること

- ・ 長期的な関わりを通して、学びを深め、大学の魅力を伝えることができる。そして、「なんとなく都市圏に進学」する学生に対して、地方だからこそ学べる魅力を伝え続けていくことが求められる。
- ・ 高校生は大学生と日常的にコミュニケーションをとることで、イメージを大学生活のイメージをつかむことができる。